

2 ホーム上における様々なシナリオ分析について

2-1 調査概要

(1) ホーム上における様々なシナリオ分析

①目的

平成 28 年度の議論は、「ホームドアがあるところでは転落しない」ことが前提にあり、そのうえで視覚障害者がホーム上を長軸方向に移動せざるを得ない実態を確認し、車両乗車までの手がかりとするブロックの敷設方法を検討した。その結果、安全な位置を探すという意味で、ホームドア等の開口部と戸袋部の位置を示すのに適切な敷設パターンを検討した。

しかしながら、平成 28 年度の残された課題の 1 つにおいて、島式ホームにおいてホームドア等がある側とない側が混在する場合といった、ホームドア等がある場合についてもホーム転落の可能性を考慮してブロックの敷設方法を検討すべきとされた。このため、ホームドア等に関係したホーム転落に至るシナリオの仮説及びその解決にはどうするのが良いか、ブロックで対応できるものはどうするべきかをブレインストーミングにて行った。

②日時 : 2017 年 7 月 31 日 (月) 19 時~21 時

③場所 : JTB 総合研究所 会議室にて

④参加者 : ◇視覚障害者団体等代表者

◇有識者WGメンバー

◇事務局

【有識者】慶應義塾大学 中野泰志、成蹊大学 大倉元宏、鉄道総研 大野央人、川崎情文 中村透、日歩会 堀内恭子、日本盲導犬協会 吉川明 全視情協 加藤俊和 (敬称略)

【当事者団体】日盲連、JRPS、鉄道ホーム改善推進協会

【事務局】国土交通省安心生活政策課：平沢、佐藤、渡部、武井

JTB 総合研究所：若原、立花、野下、渡辺

⑤会場設定：敷設パターンをサンプル的に敷設して、状況を説明しながら実施

⑥内容：課題の設定

1) ホームの形状

・島式ホーム(単式ホームと比べ、混在等による誤認識の危険性が高いと想定できるため)

2) 島式混在の場合のホームドアの有無形式

・片側中開口ホームドア、片側ホームドア・柵なし

・片側大開口ホーム柵、片側ホームドア・柵なし の場合

3) 敷設パターンの差異

・ホームドア側が開口部点状ブロック 2 枚敷き(内方線付)、柵なし側は内方線付き点状ブロックの場合

・ホームドア側が開口部点状ブロック 1 枚敷き(内方線付)、柵なし側は内方線付き点状ブロックの場合

・固定部の線状ブロックの有無を考慮

4) ホームの構造上の状況

・狭小ホーム、柱や階段、ベンチなどに遮られる場合

5) 人の状況

・人にぶつかる、待ち列を回避する、声を掛けられた場合

以上よりシナリオを用意し、起こりうるリスクの想定と誤認識を起こさないブロックの敷設方法を検討する。

2-2 調査結果

調査結果として、主要なポイントとしては、以下のとおりまとめられた。これは、あくまでも平成 28 年度に課題として残った、様々なケースについて議論を行い、整理をしたものであり、今後のブロックの敷設に係る議論のための資料とするものである。

(1) 前提

- ① 歩行訓練士や盲導犬訓練士などが進めている歩行方法は、平常時には有効だが、9 割の転落事故は何らかの誤認時に起きていることを念頭におくべきである。
- ② 歩行訓練士もホーム上の長軸歩行を推奨していないが、鉄道駅を利用して移動する以上、やむをえず乗車駅か降車駅のいずれかで長軸移動はせざるを得ず、より安全な駅で長軸移動をしているのが実態である。

(2) あげられた仮説

- ① ホームドア等がないのにも関わらず、ホームドアがあると思いきみ辿ろうとして転落する可能性がある。
- ② ホーム上を歩行時に、長軸方向がわからなくなり、長軸方向を歩いているつもりが短軸方向または斜めに歩行し、ホームドア等がないところから転落する可能性がある。
- ③ 車両停車時にホームドア等が開いた際、車両先頭部の車体が存在しない部分も開口部となっており、その隙間から転落する可能性がある。
- ④ ホームドア等が故障中で開口部が常時開口している際に、開口部が閉じているものと思込み、ホームドア等を辿ろうとして転落する可能性がある。(今回の議論ではあげられなかったが過去調査研究より)

(3) シナリオの仮説を踏まえたブロックの敷設パターンの検討について

- ① 前提として、ブロックの知識や駅情報のない人でも迷わない「シンプル」で「これまでと整合性のある」ものが望ましい。
- ② ホームドア等開口部について、平常時に線路転落の可能性が少なからずあるのであれば、ホームドア等のないホームに敷設されているホームの縁端を警告する「内方線付き点状ブロック 1 枚敷き」とするのがよいのではないか。(ただし、1 枚敷きの場合は、ホーム縁端から点状ブロックの離隔 80~100 cm としなければ転落の危険性がある(平成 12 年調査研究)。また、ホームドア等の筐体からの離隔が 30 cm 以内でないと斜めにすり抜けの危険性がある。)
- ③ ブロックの敷設パターンの違いでホームドアがある側であることを示すなど区別する方法も検討してよいのではないか。その方が、ホームドア等の開口部がわかるなどの昨年度の議論も活かせる。(①②とはトレードオフの意見)
- ④ 線路転落の可能性が少なからずあるホームの場合、「線状ブロックで誘導する」ことはできないのではないか。
- ⑤ 単式ホームでの従来型ホームドア、島式でも両側に従来型ホームドアがある場合は、車両ドアとホームドア・柵の開口部が一致しているため、線路転落の可能性が極端に低いと考えられる。この場合は、これまでの敷設パターンや線状ブロックの使用、一部の鉄道事業者が進めている情報量の多い、より親切な敷設パターンでも問題ないのではないか。
- ⑥ ブロックでできることには限界があり、人による介助や、車両ドア位置を知らせる ICT など、総合的なホーム上での転落防止策の検討が必要。